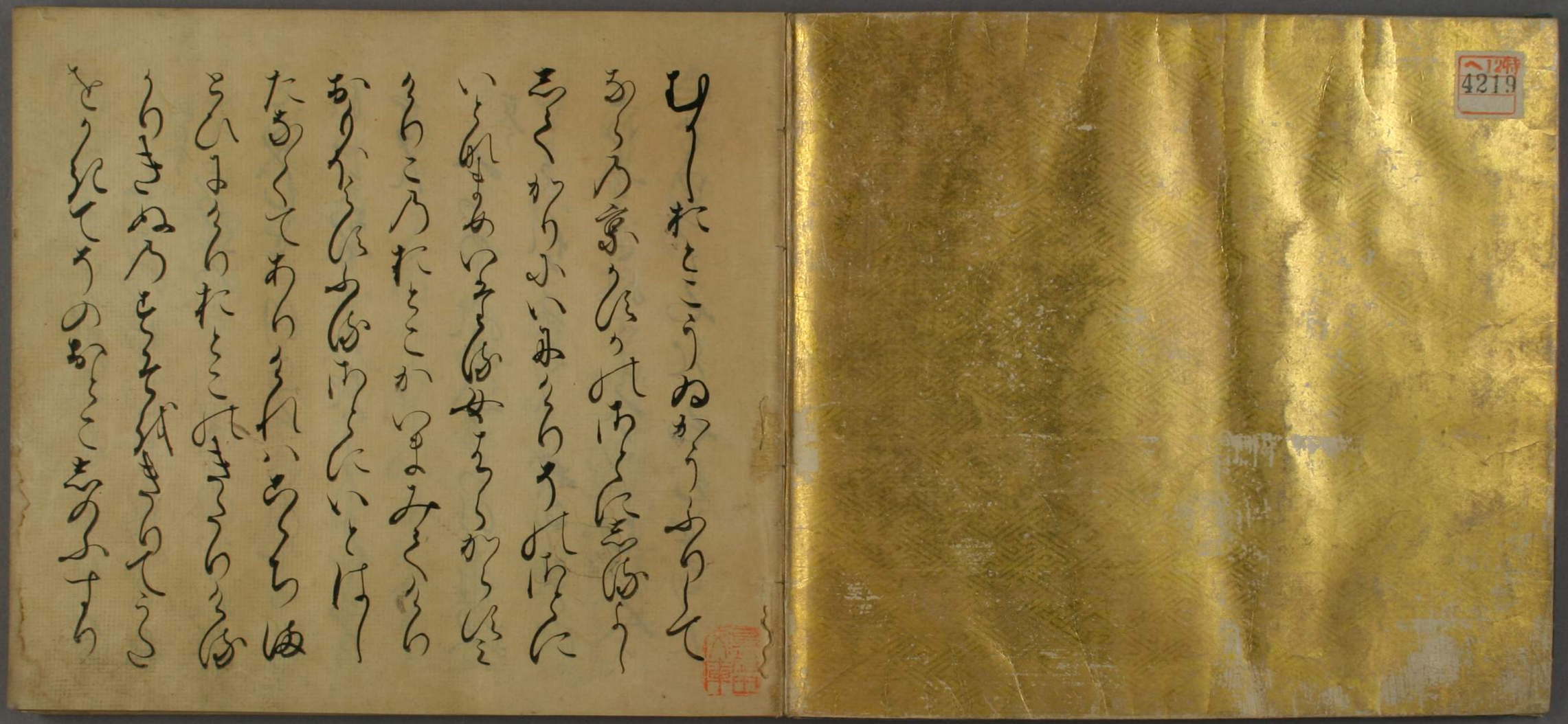
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

4219
~12

へ12特
4219



乃ちかきぬ[illegible]

新古今 かすがのゝ[illegible]

とあるもとをいけまきていひやらう

はいてゐりしをやうこそ

家ん

亭 みちのくに[illegible]

[illegible]

といふうたをいふ人の

かくのごとくやうにとあん

志賀の

河原大臣常也 左大臣源融寛平七年八月薨 三十位在中将北家先達 何

[illegible]たこと有[illegible]

[illegible]れこの京[illegible]人乃家[illegible]

[illegible]ふりにけるよりこの京にあ

[illegible]乃女房人[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いく四ひらん時やうひろいい
めらあめそ代ふやまうう
ほとぎす
春のしらべ
むしたくこあうう
うぶかのうたにしきてふも
乃武やぶそ
四ひあうむちやふ神ぎん
むしきのあて神ぶも
二源乃きちのまうみうふを

ぶかまうたなまそ毎人ぎて
をうぶ時乃うを
むしむんうめ系ふれは
きさい乃えたうぶ
志れ毎いあすむ人あうう程
をかふをあうて仏ぶふう
里うぶ人ゆきうしうぶを
む月のナゆうりのかたかう
ふうれふうあうとうきけ
と人のいきかうふまあうあ

ちりそれて行うしとおもひ
なんあるうらみなるよのとしむ月
ふむめはれたちうらにこう紙をひて
いきてゐたちてみゝくゝれと
うにかうへくもあるくうちきた
てあるうらみいうきに月の
うふくまてゐたてうれる
いてくうらみ

月やあらぬ春はむかしの春なれど
つゝ身もうらのいりもみみてて

さくらみくゝ春のかなくとあるを
ふるくゝかつてふるう
むくれたこゝうえんうよ
あるうらにいとゝいとひていき
うらみそうあるあれかと
うもえいてそわゝえのふゝあ
ゝうけれいもうけくいきうう
かうひうゝ初ゝうゝあう
初とあひうあるれゝあるを
ちきゝたうてかれひちよ

ゆくすゑあり

人まつかとひらけぬるかは

とりあつめていとうるはしう

やうやうあゆみてうら

二条院きさいのみやにまゐりたまふ

うら紙せんきうしてわらはれて

せうとうのまゐりたまへ

うら紙

ひとりたちあらはれぬ海

志うら紙へうつる

まうらうし紙からうしてぬすん

いていとうきふかきうわた

川といふ所をあくいきれば菅

乃うへみちのくにつ陸奥

もあふさとれんおくにひけ

ばゆくすゑおくにもかけみ

えいあふあふあるもうて弥

ちへいとゝみちうあるわめをいと
うあるれとあるうあるふるに
めをとれとにをまてをとこ
ゆゝやまうひをあひてとうらみ
をうをやもあけあんとうひ
はゝぬうるにあふるやむと
うちふうひくうあるやうひ
れゝ彼あるはちうたはえきう
はうるやうく水もあけゆく
ふれをぬくゝ女もあゝ何

志はうをてあけうもうひあ
ゝ玉うあふそと人のうひ時
嘉とあうへきれまれ彼式
をれを二条乃きはにのいこれ
女れのはうにはうまるやう
めそぬゝ海ゝうゝ式かうれ
いゝえんくたくあうきれをぬを
てあひていてうあるうゝれきう
とかうくれれゝたうゝよる
の大酒をまゝとトうあてうへ

まりたまふよいみきうあく人あ
ゆすきてはきくとゝめてとりえ
志たまふてらうゝ行ゆかくおみ
とハいふあるうらうまきいとわうて
きちたりあくにおそ〳〵ふる時
とや
ひ〳〵たゝこあるうらう京ふけり
まひくあるいまふいきふるり
いせおうらりあるひろうみつる
とゆくに波乃いゝろくあつ
をみく

後撰

いゝまくはきゝもゆきまよ
うゝ山まくもうえふるみうる
こるむうるうる
ひ〳〵たゝこうらう京やはうう
かうえんあつまの方にゆきてはう
みありむとてとうとうう人む
うふうらうきくゆきうるの
乃ふあちまの乃あけみうる
うをみく

ちかのうけみ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

古今

かぐやひめのはつかのち
ちゝはゝそのいまはしらぬとなけれ
ども
とまりにしかぐやひめのこゝろを
うごかすべきことのなければ
ゆきてもかくてもあるべきことか
はなりけりとおもひてかくなん
いとゞかなしみたまふ
かぐやひめのこゝろ
なにかはこのよにとどまりはべ
らんとのたまふ
ものをおもひすまして
いとゞかなしみたまふ

古今

ゆくへもしらぬわかれにはなれ
ぬるかなとてなくこゑ
ちゝはゝそのいまはしらぬとなけれ
ども
とまりにしかぐやひめのこゝろを
うごかすべきことのなければ
ゆきてもかくてもあるべきことか
はなりけりとおもひてかくなん
いとゞかなしみたまふ
かぐやひめのこゝろ
なにかはこのよにとどまりはべ
らんとのたまふ
ものをおもひすまして

山ぶきのうつろひかはりあけたる

式院御庵室とゝふ所あり。是は山ぶきの花盛にて山ぶきの色
殊好早河内国蓮珠信用法式所をうつりかへの

かきつばたのうつろひもかはらぬやうなれ

ども先人命絶維高塩車乳母也
不可用之仏之ばかりえん

注年有弱冠人蒼惶不知所之

行ゆきくて武蔵野乃ふと思ふ

ふちのうふの中ふいとおかき

ものゝ川あらそれをすゝはのと

ふそ乃川のかたらにもまれて

ものやまこゝろもあくもく

きにてゝふれとまひあへぬふさ

ものゝうちやふ〇ふ乃色日を

れねとゝふ乃乃てわさらんと

すゝふよられ人相ゝくて京

ふゝふ人きみもあるもあ

ゝとゝもゝゝきゝられゝと

あゝとあゝきゝ武乃ふかきき

ものふゝ乃うへよあゝひゝゝい

ゝふ京ゝてみゝねゝゝれゝ

見る人うらやましくそうらに
ひとれいもれあんこうらと
ゆをきして
ゑふれたるいとまとうんやうを
けうおりふ人ありやあるやと
こうもうれいあこうそうてあれ
みうら
ひとたこ武蔵乃ふまて海
ひわきうちうけうふ
あふ世ようひうちうちうを人

かあてせしとひうちをいん
あてるふ人ゑんにたをうふ
ちいうをもあてうをあんふち
うあのうふちくあんあてあふ
人ゑとうひうふこうむこう称う
うみくとこせうちうをむ而
うんいふまはこうみうう乃
ちうあのうふ

みうはゑのむはうもをこふよ
さ見うかうをあてうをふはうあう

ひさう秋入〜

わう方にはとゝかるあみのの
あうむのうはいけうまん
とゐん人乃ふるてもまはうは
こゝろんやまはうは
ひ〜れたこゝのはまへゆきは
ふなうちもにみちうひ
とこせうは

拾遺

うひうゐよかたふ井にかぬも
ゐゆ〜月乃あうはあまて

ひ〜れたこゝうは人乃ひすあ
ぬすて〜ひはへめくゆかと
ふぬす人あのれをふ乃みゝ
よかうめれはうかとくさ
ひうはふをれてみけみうは
みちうは人こ乃野はあひ人ある
ひとて央はうんとはかうひく
をひはうつふはやきそわう系の
カスガ つまうもこうれはうれもこうれの
とうみうはきうてかとはうて

ともにゆくいふそら
ひとり武蔵あぶれたる京あぶな
乃りたきこゆまいとろうきこ
ろ称そらぶ とかきてうそうそ
みむしちわふこちかれてをこせ
てろをもせひありにそれを
京そらか
むしちわふこちふふりてなむ
とはもたしともちち
とうぶみくちんせんそうそれち
志そらぶ
そうはいふとうひうむさあこ
そらぶをちゆやんいたぬんん
ひとたこみちろふすそろり
ゆきいそうにそうこあぶな京の
人はうそうゆやあたそうんきちみ
をもへぶいちんわそうぶちてう
乃をんな
中くに高ふきれすいくはをあそ
方系 あそうんそうぶむろをそう

うちなへてゑもひとうちふるはせす
ふあれとやありひとんいきて祢
みうり和ふくいてふれハ女
和もあけてきりはよりあなてたけの
ままたれみるきてきれとやとつ
といつうふたてこ京へんんまうふそ
うりてあれ和ちの和れ人なうて
みやこうはたいいはいはとを
といつうれてうろこうひてとひ
京ゝと我ひとうふ

ひゝみちうふてなてうおと
なき人のめふかうひうふみあや
ちうちやうあてあうへきなとも
わうふみうれを
志ふふ山志のひてからふたもうふ
人ふこうれおくもみうへく
女きうあくめてそうゝとおりへと
ちふちうれきえひとあうをみ
てていくいきんを
ひゝきうあうて和と以人あう

そう三世乃みつたにたうゆつて
ゆよあひそれとのちハせうつて
ゆうつりみそれとよれつ秋の人乃
ともあつたへつそいうつつく
あてそつあつこ乃こそとを
人ふもあひまりけ〳〵てもれ
むつそつの志ゆ乃いかつそあ
ほ秋乃ともそつひとつあ
むつれつあやつくとこそ生
てほのみあまにあつてあ秋の
ちれそつてあつあつとこつへゆく
をれそこゆこそふもつまきこ
こそつあつそれいゆとゆく
をいとあつそれとこそれまけし
それハそつあつとちもあつつ思
つもして秋んこそふあひかこそい
そつたちのりそたかつくいま
ハそゆつそ秋ふつもいちか
あつこともえせてけつそふそ
かこそおくふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きえはてぬるものから花をみるやと
むしのあるじあるほとけあるらん男
ちかう有るらん女うるむ人なるら
きれて心うんとてきくの花の
うりろへほとけありてたとこれと
へやほ
紅ふかきいつくしきゆきの
枝ちかきにこのかたそうを
おもこしひとみをみるほ
ものあはれうんのきくを
ありをほ人の袖をもみゆ
ひとれたこゑをほうへしるほ女の
方をもちらるほ人をあひも
甲をうるほかもあくかきにる
あるところるれいは女のあはいをゆ
ほ抱うれたこもあるものかも
思ひうるほ女
あまをもれるそふも人のあらゆる
ちて
ちすうふあるくをゆほるるら
とうあうれておうをこみて

わすれぬるせんとは
をくゆきうら
わり井ぬ山乃風をやうあり
とうあぬうぬハ又れたこわぬ人と
あむ乃ひうぬ
むーれたこやまふあうぬ武
みくうをしてあひみうちて
かうへて京けうへうぬ人ぬうれ
うかへうをうぬみちふやうひうら
ぬうへてのりみうれいうをりわき
わうりて女乃りうたんうちうひ

やぬ
ぬうたぬ武きてぬ枝ハ毛ぬうう
かくうり秋乃りみちうぬれ
とてやをうりうれハ七年ハ京
ふきりうてうんりてきうう
いけ乃まふうりうふれつきぬん
きみうわうふハ春ぬうら
むーれたこぬいとうもくひっ
うてうとんるうちうれぬ
ぬぬ年うわうえんいうくうぬこ

とふにしきく世中をうこもりし
ていていあんとそひてかくはうこ
とあんをみくはゐうきにけゐ
いていあるいうあるとひやちん
世のわらはゐ人へちゐ孫も
とをみをれていいていふらこれ
女うかきをれたうにけちうゐを
くくさこをもおれをあるく
らしてうかくらむといたうる
きていけうをみりをゆうんと

かをふいてをみかうを見れとい
ほ所をかりをもおをちうれ
をかりうて
ありひるれ世ちうる年月と
あるにちきうて我やすもひを
とひてるうめをり
人いをうやひんむうく
あるひゐのいをみを
このゐいをむりくありて孫ん
をもひくゐやあうんひと

こゝろぬる

今はとてわるかるるなな

人乃ゆめまうをしもれ

ゆ

忘るゝふとたよきて抱きてハ

思ひとゝまるもさるまて

よくわるをさしらるゝひうて

てれたこ

新古今

まちんとこゝのうちひな

ひのうちふ抱うるかき

ゆ

中宮たちわうをれあるれく

新古今

多乃ちれくもあるにるか

とゝひれとあのせてにうり

みれいうとくあるかうら

むしをあくてたえよるかう

れやまひをけりんなすとう

うれあうをんをふえるもをハ

新古今

かけうるみつねをうもき

とうりうれをけるうひ

てれたる

あひそへ心むすぶ琴の海の

わかるるまてたえてこそ思

とはひとりとうれしいかりいふ

ちへゆきにしのちもなをいひて

船のゆくちのかたむとのふるまて

やちよ移るやわすれはあらん

やう

秋の夜ちよにあさるもの

ちとりて鳥やるるん

いかへるもあるれあてるんかな

ひとる

むすび升ありわすれ志ら波人の

おもも升のしるふいてはそひ

ちるにおるるにありふるれい男

もなもちうてありれと

れちこいこの女をとうえめとそふ

女いこれおるこ琴とりひいあや

のあるひはこもきてるんあの

ちるこの乃れたこの

りそうかくるむ
はく井つのわりにけさまろかた
すきふそうれいりみちうまに
女房
くんこうふりまけるみもかくひき
きはんるしきくなまこうはくき
かくひくてはけみかいのとく
あひふそうちく年こうろうかと
ふ女あやるたうるなはま
まふりつるふりて

あるじやいそかうちのふたり
やちのこれのおいきかふおいて
きふそうちうれこのりまれ女
あとおりしはうたもるていた
さうやまれおくこむるあ
てかはあるむとうひうひ
てきむさいの中みうれけてから
ちへいつうかめて乃まはこの女
いとうをちうしてうちるあ
て

風ふきまよひ来る波うち
ぬれ
ぬるまや思ふ人こゆらん
とうみ海ぬきてかうちあく
れしとゝひて河四へもいふ
あらふうち面まくかゝあやし
かさて月まいうめうふめく
もれうれいまうけ
てまつうういひとうてけこの
うりて相みりうぬ人てん
うりていうはみうちうれ

しうれかやまてゝ乃うぬ人やて
思う何うれけてうんにま
ぬ
うれうて物ふ面ふ
とひて月いうはかうも
やまて人うんというりうこ
てまりみうひくすきぬまい
思うんとひううたにるあ道
たゝまぬのうひつうう
とひうれとおこほかあ
ひしたこかるぬるふすみ

うちおとこえたちくしにそてわ
きとりみくゆきふるまに
ことをせこちりれいまちわひさ
ひとりぬみいと稲んろよつむ
ゑ人みちひあくしひとちに
ひとりぬみこのおくきさら
りこのあけたまんとたき
れとあけてうゑるんみく
いかりかりぬ
わたまれ年の三をせまちひも

かりかりひとりふ井花すれ
とひいかりありられを
あいさうぬうつきち年とて
いきいかとうぬつみきる
とひて仔ちんうれいな
あいさうけとひ稲と青ぬ
いんきみみうみものに
こひれとおこのうふう
ないとうのくてきりふたて
をひゆ宝とえをいそきう

乃あるかはらにこのうこあり
るかいたにおりひろてうき
はきるか
ひろひてかれわる人をうら
ひるべくれきてそぬるか
とかきてうこにうりは
うり
ひしたこ有うりあうとも
ひとりうるか女乃ひすうありけ
かりうりふひやうをうか

秋乃はつかりけあさ紙ちら
をき
あてわるれそもちはうら
をこ乃うれる女やうし
をき乃あるに紙多とうをきるか
ゆ
十四
れるてあまあたゆくるか
ひしたこの際にうるあるか
女をうひるいふるかうひ
をうる人乃也うふ
おりひ神ようれのうるる
動をき
りうう舟はうるをうみ

しらかとの母のもとにもとゝい
きてみもいそのあのにゝれをも
のはあふ所みねきすぐうち
やまてあるひのけみえん
ゝをとりうら
我ゝの袖そふへみもわし
とおりへゝ水のもとにもをり
とうむとこゝりゝをおもとたち
きゝて
みるゝに我やゝゆゝんかゝえん

水のもとあてりあるにあく
しいろこのゝあるゝをあいい
てゝいみゝれを
なをかくあふこかゝみかはん
ありゝゝさとゝもとゝ志の式

貞觀十一年二月貞明親王方皇太子二十四日高子方書
依春宮母儀号也去年十二月廿六日遷皇太子高子年廿七

しゝ春宮のの方の花の
ゝよめゝあはけられゝをよ
花のあるをきいつをもゝ
新古今
ふのこゝひあはけれし

しりおとこたちつうきをかしまの女はよ
あふてはむかしのことをとらはりてて
はるきかりのあるくはんゆらん
しりえんのはてあはこたちまち
つかはのまんをわらるかみるふ
のあるふうに思うえんらやさ者よ
あんはうあんとうふおとこ
はるもあれ人をうきへうはれ
をのうへあうあるとふるう
とうをかうむ女もあらう

しりはつひとまかは女は年ころたて
いはへの志のうのをまれうはし
家あ しりをかうはるたうもうる
こいうりれとあるよりもしやや
ありうむ
しりおとこはのふむをたて
りふかうひうはかこのひさ
ていはへもりとおうはうはうまし
まうしおとこ
上右百歌 あへうみちうはかこのみ

[illegible]

こゝろはせをよんでいそのかゝ
ぬきちらしてゆくとうたよみ
なるゝ人の事をいてゝなりやゆ
しらぬこゝろはまきるゝ人
のりとふ

以ゑをいとゝ秋のむしなきのれて
いもりのよるけくこゝろる
おもるゝていをはあるへし

しらいふもあるてたゝ人の
りとふ

むらをあるおよりてむしの食ハ
さきて乃ちもはゝるゝんとそゝ
しらはれゝるゝまりとひこ
ゝるを女乃りてに

若きをみ学まてきゝ人ゝむゝ
ゑゑしと人よりありてまるよ
しらおゝこゝをこゝろるを
女よあゝりゝゝゝやゝけん

我身にてあるこゝろもとゝまるかの
ゆふけまさるこの花よりはあらじと
也
ふるさとゝむとしりのなれりて
あひしらぬまもなくいとゝとゝまる
むしきりあるつねのいきてと
ゆみあれきてとゝまるよ
みくやまもるゝ
ふるさとのひとゝひぬ夜中の
人をこれをやこゝにいるらん
也
あるかの夜の夢にこゝろをふる山
ゝとしいふとゝ我しを
（保和元年）
むし西院乃みとゝ中尺の紙
りまきりの牧乃みとの尺こ
（宗方門部と母橋部子西院と保和十五年九月廿六日死）
ゆいこゝろ
乃みこゝを結て
ゝ此文のとゝまるなるゝ
れゝゝ尺むとゝなゝ
あひ乃りてゝゝゝゝ

きりかくいてたるまりのうち
ゐるてやうへうゐあひて
みわ兎のたのあこと源の
いてゐといふへうこれもものゐ
みこのゐゐまれ母ゐまて人
てゐりきてとうくなまりくわ
ひとにゐのいてゐかゐゐとゐ
てゐのゐゐ母みいまてゐきゐと
ゐゐ母ゐりゐゐ人へこのかゐの
ゐりゐ兎ゐやゐゐゆゐんゐり

きゐりゐむゐゐゐてのまゐおゐ
のゐゐ

いてゐまゐうきゐ母へゐゐ
年へのゐかゐるゐゐゐきけ
かのいゐゐやい

いとあゐれ母兎ゐ兎ゐゐ
きゐゐ母ゐも我ハゐゐすれ
あめのたのあこのゐゐて
ゐ程ゐありゐゐ
いゐゐハゐゐかゐゐ母ゐ

みこのかいふり
しらつきおとこきうた
あるぬをもふらはらひ
ちやありくちひもとけて
このをかんをひやらんを
はうういへもをいやらんの
こるれはもつきあひまう
れてしらはいきあひす
をもいやうれてはもふちう
るちあひにはいや

まはりにまはりふあこ
のをひうはおとちはるう
をるをもちはうれ
かくはていねおとこるく
ふはは
いてるはれはうんん
ありふまはふふるは
とみくたえいりあうあはあ
てふうはそうてうはいか
いとはうをはりをあふよ

きんちふあへいりふれをはと
むく和てそうふ乃いりあひ
そうみかきえいりく又乃日は
仲ぬの時仲みるんかうして
いきいてそうそふ
むしり乃いへそうひそふも
乃ひとるむしえふいまの
おきれはちみしるむや
むしかきりのふうりはう
そうむうちいやしきおこの

まいきむうちはあてそふ男
りうそうちいやきおこをを
ふはきをはこりはこ人
乃そふあひくてはこ人
ひそうふいうしはれを
ちはいやきこりもあこて
ちうれいう人乃きねれこ
とそうやひてそうせむか
もあくてそこるれようきさ
そうれをうしあくはう男

きていとゆかしうおぼえ
いとさうさうしきものにおもひ
うんでうきぬをてにとりやすらへ
ひとりのたまはくはかもよ
鄭重なる事まうしたるに
むかしのいまのものがたり
ひとりたちこゑこゑにこゑ
くるまとあひにけるはまに
とふらうとあるにちかうし
たくいきうれをかいとう
ちかくちかくそいてそこ
えあがまりかりうちなげこ
ゑあるまりをなげあるあうれ
たふりうみうちうちうちの事
ありてえいえそ手をあん
いてうあとたないまうこと
新古今
あうらひちと今はあん
ものうちうちうちふうあがうら
ひとりやすみこと中ばみこと
寛陽親王植武第七冊 人々法次武三郎法名
貞觀十三年十月八日薨 七十八

つゆのうらみこ女をあ
ぢめていとめこうめく人け
うたまひ給ふ人ちまもれ
てあり給ふ我ハことたりひ
給ふを又人きこけそふや
ゆかしきこきこ乃うたて
かなこ行すあらかく置あまこあれハ
をこ
行うときれぬ思ものこ
といつりこ乃女うきばうりて
ゑ乃うらけ志これ給ふ行そう
ハかりあもこをうときれぬまハ
時ハ月ふるんあり給ふたこ
ゝ
いかりおきこれ給ふ行の心
ワすむちふふあうしたいハ
むこあうへゆく人よ心まの
るむけきむこそもひてう
ゝ人かあうきれ給ふ
ゝしちつきちをてゆき
ちうゝかりゑ心とにあう

乃れをこうしみくものうに
ゆひけさに
いてゆくあらなかふとぬれまい
我ゆへもるくなりわかきうる
こうしふあるほうるふあり
わきれをんとうあてうまひて
うふあちひて
むしたこ有うへのもすめ
わうしけくいうそむのおこふ相
いうむとふうちいてむと

かうやあうえんをのやこにうち
てふゆきけよかくうありしう
とひうふをあやきに寄て
るくけきうれを面をひ
きうれとちよれいつまく
とこりをりうけみる月の
けこりいうあつきうをひり
れわをわをひをりてをけ
てやすきを風ふきうを
たくをひあうほこのおこみ

ふせりて

はるかなるをぬしおもへくハ

後撰 加風ふくとかりにたけこせ

ふれるはなはぬしもしらじまい

そのかくもとまるべきハ

ひしかこいとうふりてきな

わらうらうはちはあひこう

ふるとへんのいきふるれ

いとあつれをかりひてつまよ

ふり月日へてをこそふふ

みわさをゆくたいゆんせて月日の

つよふるとはるれや志ほよんん

といくく思ふしてあんはせ中の

人乃いとゆうふまこハはるれ

きはふこうあわれといてうれ

こうみくやは

ゆうふやとも知ぬるにはふ

はるおもうけまこう

ひしかこ初んころのいそと志

女わうふうまとこ乃れたこう

あるあらのとまきてはまこるかのこ
まかりけくいへば
れかねるあをてあまこにかぬれを
をへとえこうたのまたりれ
やしれこ
ぬはねかこをたてれ流ても
せ井みこのせいありとこ袖
しれこ有こむまのれ
むけやしてて人をゆこりこ
こりきれて

今てをかるる紙と人またむ
古今
ゆこ紙てれ決こつへこりこ
しれこいりとこいこ紙
けありこ紙みをして
うこりみ祝こけみこゆかつ緑
人のむすりんて紙そこ
ときこえこりやし
こまこ紙とめこきこれて
うこあ紙ありこ紙
しれこ有こうこむゆ人

をうしなへく

無常をつくしぬるも

ともなる人をとりよるのハ

といへりされた

あさ霧のきえんかたもあらぬ

たまのこしのせぬのをたへき

よるなこ

吹風よこ枝の梅ハちりぬ

あるゑ乃こかゝ人のこゝろハ

よなせ

なを梅ハ水よりくるもちるれさハ

春ふ

ちもなる人をこふなたらう

よるなこ

ゆく水のこゝろのよりとちる花を

いまこそてふこゝきうん

あさうへうみよ志ろかれたこ

女乃志のひあいきゝ事

るゝへ

ひゝたこ人乃をしちつよき

うへうみ

うゑ〜えハれるき時やさ侍ん
花ちちるの秋ちへうれ色や
もり木とこあり人乃りと
ちらかさるちまれをらせた
里ちが代事み
あやうり恋ハねまふて酒ひ弓
我ハ野よいてくかうてもしき
そてきしとるもしやうまちが
もりおくあひうれ女よあ
えくねうるおとひうかなよ乃

乃ちきうれた
いそかて乃れ乃らん人ふれを
おりよ四てまちふりきよ
もり木とこ乃ほまきなりうが女
よりひや里ちが
形やらあ長ち式なのしたなりよハ
あまりそちるが寝やをらん
もり木とこ心うけうが女ま
えう海ちうるりての色よ
おそひ有もひ乃めと事れの

ちりつもるふるさとのはるる
ひとおもかてそ思ひおこせて
ふるさとのあまりのくく
乃紙ハ草乃庵にかゝるも
ふるれて嘉のやうなりけり
ひとたこ人きまねはりひ
ふりつまきるに人乃ゝに
ちひろひあまれるもしやうな
我ふるもしらるるつるふ
ひとに人きてふこ乃みるる男
なるをかとつふあふ家れてそ
ふるさこ乃ことるりあるふ家
りたにもあれ女ともはるれ
里ふれた田かんそこのれそこ
乃ふるみくい乃ふれ乃ふれ田
はるるやとてあつまりてつり
きふれたこおそこふけてれくよ
かふれよふれ女
あれなふ乃ふれてせはやふ風や
ちを
ふみふん人乃ふてつきふね

とひてこゝろ
てありそれてこゝろ
もそもひてあれ
かりふもれよの
とてるんいてゝ
ともかもつもむ
うらひておら
れも四ゝにゆ
むゝおとこ京を
もんうゝふよ

すみもひね今ふ
ふれうひきやと
かくて拍ゝや
ゆきそれおり
ちくいまいて
ゝ
ゆうへ
ゝ
とるんひていき
むゝれこ有
いそかもくふ

後撰
家者

かなの人とうしゆめのおもむき
とゝふ人みつきて人乃ゑへいり
うこゝ乃おくこゝ宇仁の使ゑていい
きこゆゑあるふ乃志ゝう人
宮人のめゝてゝあんゑゝとき
てをんなゑあゝよかゝけこゝを
よゝゝゝ乃まゝとゝひゝれを
かゝけゝうゝてゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝゝゝゝゝ

女せう

後撰

なかしおもふこころにてあくがれ
ぬるたましひのかへりくるなりと
いふをきゝてよめる

ひ[illegible]年こゝろをくるまにのりぬる
なりけりこゝやあくがれにけん

くるまさへ人の事をきゝて人の
ふるまひをみけんこゝろをくるまに
乃せて人のまへにきてゐたる也
をこせたりけるこゝろ我をたゝ
らしやとて

いまはとのもりのいけにさきにける花
こゝろぶとくもありけるかな

とゝふをいとをしと思ふくいつ
へもせてわらはをかしいつもきね
といへとなをこゝろにあらしにもみて
ひとのもいとれすとゝふ

うれやこれ我なあらしにあれて
年月をへてとまりにけるかな

とうひさきのくきてうせねとひ
てふをまうらいけいうちいねんも
ちうに
ひしてをこうろにうれてうかいうて
ちうろうなりけあうむおうこにあ
むえてしうれとおりんとひいてん
もあうりなりあうはとあうれ義
かうりをひなをこんをとうひくかうら
うりふうりうりなハなりけあくいう
へくやうねりうちうりうあうりうふよ
ちんうれ球こうういてうんやあ
てひうふこうりなうりきいうりう
をんハいとるりけるりいうそこう
在五中ねりあうをてちをと思ん
ありかうりしありきうふよいきあ
むうみちりてひむりうりうるう
てかうくうんうりふとひうれをあ
うれうくきて彩みをいうく
うりうをうみえりうりうれをな
おうこうりをみいまそういまみうう

をたちこれ乃ふみを
りとせに一とせたらねはもろみ
我とうふしかをもうけみるゆ
えていくあのうきなみてむ
つかたちみかりて家にきて
うちふきりおとこか乃ゆせて
やに志のひてあてりてられを
女をけきてぬとて
志りりみかうきこうひや
ちき志人かわてそれら移ん

こうみるをたちこあるれこいて
う乃世と移みるり世中世いと
ちくおりふをくおりひををれ
しをもるぬ世ぬこ乃人をおふ
をもたをるぬをもるめ乃世
ぬころるんわるる
ひくたこみみうふりるる
つをもきりるれたいるる
るんわや志りみるる
吹風みつるなるりをれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とひてうむつみをも
このみとかのからくらしてを
きてなりけのれんをあかふい
きてくれたいといたりとてア
たまふをきてそなていたりなれ
をりかはあるよりはうはつてひ
くせにてをくうかりき事このの
おくこふかるこゆまてくそてちんをた
をふをかをたにみてきこうり
にをきてこのおくこをそをありした

うりてくれてこのなのいとこれや
すとこうなをくはつそうをくく
らにこゆそをおりたまふれいを
みこりてをく
をそ あまれはもしたもの我をと
典侍 直子 ゆをとうるあをあをいうみし
とるをきをれたこのおくこ人の子
をりをそふきけくふをいと
おりをくふきてくこをいおうう
てうあくれみうくひをはかく

まてこの女こたりあるそれ
めうあるかときけとあひみ
ぬへきふもあてるんありきか
ありともこのろんうるれ
あかふもあるねをらせて
とりひとりおとこいなしあて
ゆくかあるりきうへ人のふ
ありきてかくうたふ
たて伊勢のてきの相ゆへみ
京者人もくりあいされて

水乃をれ対るゆへしあくるや
ちんあもうめとけく后也の系の
后ともも

清和天皇鷹狩之遊泊瀧之娯未嘗面意
風流是端歟神住

もしたこそ乃ふく者あをを
ふかあみおもふ友ちむきあて
をふ乃ふこいきるる武
乃をこふ移ふもあるれみく
をふ乃ふけさふ乃ふこふ

後撰

これやこの世をうこはるふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春のうみへゐなりぬる海
とうあるうれたうこれ人くる
まちをるうふうり
むしおこと有うりうれたこ
伊勢のうふくりの使よきけ
ほよかの伊勢の奇家りうふ
人のもやけ秋のつひうりハこ
のへくいこれとひやまう
れたれやのこれ里れを
秋んうふいうりあた

ゆしかりふいそうたてやゆふ
ちりかうけうこにちをう
あうて秋んうあいうりきう
二日とうあおこわまてあう
とうあもうきいとあうこう
おんうにちとへ人ちけれ
えあうにけうひう秋とあふ人
るれうにくもやうにちを女秋や
ちくあうれいを人をうりて
秋ゆうりをうにおこのを

ふきうらかぜにおとこたちわかれ
ぬるをとゝのうつくしうしてふせのみ月のおもかげにみち
むかしにつゝまれみめてく
人なてらおとこ伊とう和ゝく
てとうのうつくしうふかくいまして
和むらさきのうへにいまそ
あふみまさるかたちもかうつ
くねよりにたりおとこいとか
ちゝくして和とをりにたりけ

とめてつゝうれとけつ人をやは
へきみ〳〵わ和ていとうれく
てゆらとれたあけをるれてい
たあはよ女乃人のうつくしことう
ちゝて
琴　えんやう和ゆきうんちりの
琴　ちうつうりゝて和てつけてう
男いとゝいなうちあれてうあは
琴　かきてをんのやとはまとひまき
ゆゆうつとはこうひちうよ

とゝみ〳〵やまてかりにいてゝ野
ふわりけとゝをうゝたてこゝろひ
ゝよ人をりかていとゝあゝしむ
とゝりふみふりゝみ行つきゝゝよ
ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝきゝて花むゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれいをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あけいをゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とすれいれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やゝゝあけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てみゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふるの神宮へ水乃宮詣時
文徳天皇乃御ものもうすかもれぬ
乃みこれいりうと 恬子内親王
ひとたび御供仕りかへりて
ふるのふるかたのもとにてやと
りて いつきの宮へ入給
ひかけるに
みかりの宮やいつくにかたて
形を 我よりへよあとりの舟
ひとたび伊勢乃斎宮の内の
れたりしかてよりまてのれいかの
宮ゐをたとつひしるに女のてる
てふて
板遺 ちはやふる神はいかきあれ
人丸 大宮人のみまゐりしみ
たとこ
あらくさてもみのちやう
神乃いはひしれみらるるみ
ひとたび伊勢乃ふるの
るに女えあらてとるれる

へいくとていはうらみ京
住つゝ女

おなしくの松はたちあるみ
彩色
うらみくらもかへるあさぶ
しらくもこふてありときけや
せうそこ成ゆふいんもあら
ねなのあらをおりひきを
万葉
あふとうくてゆふくれの月の
うらくらこれきみあらあら
しらいとこなといたらうらみて

万葉いくとねふとうちるあふあふも
拾遺
あくあの日おくくこひきをあふ
しらたこ伊勢乃ふあくく
いきてあくしとつひれいな
岩ますの海よりふるかよ
ふくるねのくらふふも
とひて海てをきるうれい
たくこ
神宮てあまれたまの海の
うらあふそやまんやひら

女

いとゆゑあるかたちにて
ものひとりかたらひもあるん

又おなじこと

源のそなたにけぶりたちのぼる
ほうれんの袖のうへにくも
をとめよあまのまつかぜ
しらしこの浦の海人の春の
ゆめやうんぬとゆめ時雨
よゆゑてはるよこれ清つる

ふるひとのなきあとにのこる
たまくしげつゆにぬれたる
まくらてをみくたくまつるゆ
ゆめやうつつかもうつゝ
夢
世のことはいひもいひあ
そのふむかるどやあるひうん
いとゆゑうんぬとひし
しらたしらのみくゝとみと
たくゆゑうつゝの時の女
たりきこゝろにみまれるうう

それをたまひて安祥寺にて
人とりてうら人くちけの
たくゆつりたくまつりあり
やうなる花ちりけるちりわり
こゝろのちりけの紙にかくに
にきてたりのまんみたくあれ
くゝもちにそうのまんようこ
きゝくそなやうみるんみえ
そなそれ紙たちわりいま
うかりそなふちの紙のき

とりひいきうかりくかりれおろ
かふうるむ人くとめわの
てくふのみの紙頭にて春の
ゝくへわなうそそさつて緑た
まふたのむよりめりくありくなを
きれのはたひるくのみくなる
山のれうりてくふのあ事ハ
くなのまれとくふとるに
とゝみくるゆ紙いまれよ
くもあくりくのうくれ

やまちりそんあそれうそう

女御後宮後下藤多賀寺子右大臣良相女
嘉祥三年十女御天安二年十一月十四日辛
安祥寺五条后頃子建立寺也
雲三条 常行貞観六年正月十六日条議八年十二月十
右下 六日右大将従二業平貞観七年三月右馬頭
裏面 天安辛女御法華如何若後近善歌

ひとりたりこことゝ思ひ侍れを
そうそう海ひらうらせ侍て古
乃みとさ安祥寺おて志賀
右大将業平つゝ乃つ孫ゆきとゝ
人いまはうそうれみひとゝ
まうて侍くかへりふ山ちるゝ

きしひとみこおそうそう海ひとれ
やまとれの文よ寺れとそうそう水
そうそうをおもうておりあく
侍られあ乃ふ山ちるゝおまうてたまうて
ひとうそうそうおもふ海つき
とうそういまそうけうそう海侍
こうひいまうてちあうそんとゝたた
まうみこうそうこうひたまうて
乃おもうそう乃まうけせさを侍

人康親王仁明第四皇子貞観元年九月入道円十四年薨四十二

ちぶかのちねいてたちたまふ
やうみやはらへのちもめふれ
とやくあふへきこと除のあかえん
ゆきせ〜ぬきのちふの女屋の
こゑあるうちふいこりうき
い〜たくまつまて家おわみ
ゆきのくち

貞觀八年三月廿三日行幸右大臣良相百花亭

さそてまつまちきたりあふ人の
えちう〜のまへのみちにすへた

ま〜とちまこのうこ物きこせこの
いとたてまつらんとのたもして
えすいきんと物ちきくうに
はうちひいくえんもるそてり
きねこのい〜きこちふ
まちまつこれをたふあてぬ
つ〜ちこちるふへ〜しそ人
くにうこよまもたまふみきの
ひとのうこるふりふ人のを
るんあはきこけをきちみて

まきこのかうこのうちけ
そたくまつの
わかなもいそたてるふみそな
んとそんをむしはるれて
このむしまのうちの
むしうれなるふみこう海
ふまんうれうふやみんく
寄ふみまれ
ふかきれのふ
我ちちもわ新とうへ

なをそれくれうへ寄
れいちくのみこは人中わ
のなんいちわ中納
ゆきの

貞敦親王 清和才八毎中納を行年毎
延喜十三年 亮四十二

のむすれくうの
むしかくへ
花うへ家ふれ
ほくりふうは日あうわふ
ふよ人のりくへ行りてたくの

はらひそてうあり

なまつ地志わてをうはつ年四月

左今

てうあしいくかもわすしと云へた

源脈 後鳥羽第十二皇子母正五位下左原全子

貞觀十四年八月廿五日任右大臣元右衛門督兼中

三年從一位寛平元年薨年七十三

むつ左乃おかいまうちきみい

まうかりそかもかはかりよ

六條まうに家をありてくい

うてをみたまひうら秋の月

乃はこりかさきれうつ

ちひちりあはよりみちなく

ちふ人ゆはをうりみこあちおり

まちをて和むうるはけうう

あそしてよ河けそゆかを

よこ乃とはりあきかむ

はううもむうこにありぬる

わをうれいるぎれうきれちにひ

ありきて人みうれよもをそて

うあは

ちかの海よいつうきふうあうれき

はりをはふ秋をこうにうれん

とあんなみえぬみちのくい
きなりえぬよあやしくあり
ろきあれくらかうらうわうえ
くとくとかくのちかくかの
とつふあれかくすとこのとこ
えうちまいはるんかれまいく
みこえはかてくちかうあよりう
きふえんとよかうえ
推為 文德天皇一母従五位上紀静子宮号小野宮
ひくちまきありけみこうとけみ
こたくまくえうしまうあの

るくにえれせといふあるう
えう年をのちうれ花ちう
みくうの人えるんれいはし
きかうのはたのもはけるる
ひとえかをつれ秋みわくあて
ちまくえうはせくえちく
るりにえれいうの人のえ
みえりかりいれんふもせて
ちけをのをはみちやはとうる
みかれひとえうはまりはりる

[illegible]の家[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人[illegible]
世中に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

迎めてうるはしみくしあけ月を
と乃たまうれたかのもまの
うみまんくあてまつるを
かりそたなるつつのやとかん
を
あまのかりたに我きまより
みこうる我やそしたまつて
やしえたまつすきあつつ称
れうもにけうまつまりそれう
やし
一ゝをにむたひきまをまに
を
やとうひ人もあしそうふ
かりて文よいせをあ乃ふく
ゆまて内けのを相うして
あ乃みこ内ひくりた
まひちんとひ十一日乃月も
かうれるむとひまをかれむの
みのもゆ
あつ時にまを月乃うう
を
山のくあけてまをもあ信
みこにかりたてまつりてきの

ありつね

後撰 をもなくて雪もたまらぬん
上野太雅 山のくるるく八月ばかりを

むしのこえもふかくなりまさり
おもかげたのみこまいのうち
しにおもひまさりまひとりふるね
のみなかれたるさき
つまりむしのなくこゑよかん
ひたまりをうられをとりして
らくいなんとおもひ

ものもひろくたまうんとそつそ
ゆるりこのひまれをふと
ありて

まらとそをもきひ
れのおとそにぬれるよ
とうみをはいやひのほこ
りありうりみこおかものこも
らそあしぬてうかくはく
まりてはくまりをを
のかふれらしたまう

てらむ月よおりたてまつる
むとて小野よりまうてたまふよ
初瀬の山のふりてるれた雪いと
たうしたかてみもつよりまうて
てをりみたまくまつるよりまた
くといとうもりてるてお
ちまうれいやうむけく
ちふひて伊勢へのこやうと
ふついてきこえうちもちう
ひてうみとおりんとおやけ

おとこもあらうれたえうちうい
てゆふられみうんほとて
ちられて人をふるしやや
を
雪ふりけて君とうんとい
とてうんうくきふふ
ひておとこあうう身をや
しおうけうんうちうふ
うのうくおうをいふところ
みたまひうこうえ京み
えたうんしうれたまつう

れと志たくえぬうてひむ
りこふ所へありれいとる
ちり志たまひきりちゆめ志て
ひたりふと人のおそれてれを
ありたるつきてられを奇わり
花ぬまこいちゆめ行りとひハ
たき
いるくみまくてきてみる
信濃百韻　貞観三年九月晦
かりこうるう地ちるさて
たき
西中にちゆめ行のるもう和
ちるりいのれ人のこりたり

むりれたこありうりわるいるり
ほうう海つりるぶきみれるてを
りたまりてりるむ月ぬいる
らひ海りてりれたかやきれや
ほうへきれを行よハえぬう
てひちまとりるの人うるて
て海りてるぶよるんりるは
むりたりまつりし人りく
りるぶせんしりるはあもなりり
あつりてむりきるれる事た

いとをかしみきこえぬまでひきちゆ
きこえひろこゆふかりてもゐもも
すゑやまもすゑるなんをひく宮
ふかりこめられあるらとつゝたた
いふをてうるあるらん
馬行方しらず
をんなも舞ひ
をを
ゆきゑつゝゆくうまうしんをは
とまりうれしみこいといあう
あられりたまうてれそぬき
てあまんりきり

しゝいとわれおとこけれ女
とあひいありとろくちやあり
れいたみてワひけてやえ
ふうとうろてなりとに
るれもうけもうちんとや
おりしうんおとこうれまく
やまりうは
新古今
今まてはをねんせふもあし
とのうはまくあはへゆまとも
うてやこにうおとこもあひ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃おりてよもきぬよいきぬて
めらんやうにぬんあれあきぬぬ
ぬきのうえにもうえのおなき
さきくちいてあるえあるれ
いしの人みえうしまるれ
えせうかうしらのあき
ちふくこかまをもうこちぬ
人みるたきのうえぬう
乃清ふのみまりもむ
わきつせはふうあるとものの

あるふれみたといまたうん
あぬしはきよもむ
ねきうぬ人うあぬうまの
まれもちぬう紙のせえな
こうありえれのうえ乃人ふ
こうふやありえんこ乃うえあ
てくやえにうかつうぬ乃ち
うぬくてうせみし宮田ちう
ようしう家のまえうぬよりれ
ねやうう乃うえれ乃人やまあま

乃いたり火おかくみゆ海みかの
あふしの乃たとこうむ
こゆ東れ乃か河きれ墨かも
つすむ〳〵うれあまの乃たく火う
とゝみく家よかうきぬう乃
東南乃せふきそ海いとそ
〳〵たとめてうれ家乃あれ
とも作てうたふのあみよ
こせれそこゆ乃ゆ見てゐる
乃うちふりそきぬなうう

う乃うゆをたうきにりてかも
こゆおわひていうあうかさ
ふりをう
海つ海乃りあはをいうふり
きうためふをゆうう
井ゆう人乃うふそあれ
やゆうしや
しいとわきみあねこ
きうれもたちもあつまりて
月をみくうれうたをう

おなじ月をもてあそぶねこの
つれなき人のをしとなるね
しやうかねたとこれなり
こゝろのうちをば人とおもひて
年をへぬ
人をこそ我恋ちるとあらぬ
いつまでかよるきれおかせん
しらぬまに人と伴うてゆく
思ひそめられたるやうや
うんのあるもうこふても
こいのうちをばなきうるれ
くるうるうちかりれあり
わかりをばうにたきく
ちるをばふかもふかもしらい
あるたのをかこのよれと
とりふんをへもあがへし
しらぬ月日ゆくをばうけく
おなじ三月のこりかるみ
後撰
をしもも春のきうれふの日の
ゆふなれはうにをかるる

ひとゝ悪にけみきつゝかへまゝに
女みきうゝこゝ紙たよえせてあつ
あへうたたるしを舞いくうゝ
ゆきうゝ仏らんきゝ仏人りれを
ひとたこゝ月いやきてていた
まれ人をおりひけうりうゝ
うたりゝゆへきけまやあり
えんうておりひおきてありひ
思ひくゝまあ仏
あるゝうゝを人きあゝ人者

ぬきやきれうゝ仏うゝ
ひゝもか仏ふゝ悪人をゝ
あやあうえん
ひゝたこゝあうゝ仏うゝあう
えん拾りおとこす仏ふりふ
宝りりよたこゝあうえれと
こあ仏るうるうれこ仏ふ
ゝう行ゝ孫と時ゝゝものいひをこ
せうゝ女ゝゝみあゝゝ人ゝりを
きゝかきよやきうえ仏をいま

おとこの袖ひぢて詠て日ふりぬる
雨ちりぬかの人たちこいとたち
くとのうらさこゆゆ事をもいは
まそたまを秋とこそ思ひとと
おりへとは人をもとうみけへき
袖よるんあらりをとそろし
てしみくやまちをゆはは秋
よるんありをゆ

秋の水八春ひとしをゆ袖をや
すらにまちやらへまちをんん

とぶしまちをゆ女ん

あの秋ゆ乃まにもちゆや
りみちもあ花もとりふちれ
ひ二條の后よりまつ
おとこあちを女のたちまち
ゆをつ秋よみをてをひ
わちをいいをの乃こに
あいかんしておかつをを
つをゆをとをしをゆん
とひをれゆ女いとを乃ひてあ

こうしにあひみうらもりかうな
とうてれたこ
むらはまひまりねあまはな
角うつきれをいまこやうてよ
こりうふかてあひようう
むうてれたこあうう女をかく
いよ月見はういうあり
あうれうあうあるやひ
えんやうあうれと思うう
りうれ月のもうてう

ありうれ女ふうさむう
ふういてきふうう女ひをこ
せうふ今ハうありをれ
分ふうもむうふりいた
月時もいとありしいう林風
ふきそうあんはうあうん
こいりうう秋もりうをひな
うかこうりうう人のうえ
いうんすりうそうせうそ
きふうりうれ女りをう

とあるふしぶしよきあらまし
こゝのかゝそのゝちとりみちをし
ろしめせてうせたまへるみくるまの
うへをまもらん

秋うけたまはりあるものは

こゝのゝちふくえにたうあれ
どうきをすてかしこうしへをき
せんちまつるやまとそいなちく
やうそのうちに世よりふまをたま
らひうてやあんあるそや

あんいあるしとうもうをれ
おくこゝあまよりのうてをうち
てるんのろひをなるもく
にうれしんのうひんをよ
のあやあんおうねはあや
うんいまうんみかとういるう
昭宣公基経貞観十四年八月廿一日広大院に行幸せ
ひうりかのうかいもうち
きこゝとりひいまをうう
罪のかゝ九条の家あてきう
貞観十七年
きうの日中わるあるうをあきれ
業平十九年位中わ不言

[illegible]

[illegible]

忠仁公 文安元年二月十九日太政大臣 二年十月摂政清和外祖 四月九日従一位

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あやまちあらんと
やまひあらんと
七〜
ものゝけのあやまちあ
らんとてこゝにおこなはれ
ぬらんかなれども
しばらくにて
しばらくおとこ後涼殿にまゐ
とわらうれいあるやむこと
なき人の御つかひ給はるを
くるしがりなくやうにそ
侍るはせ給へりうれたま
ふて
ものゝけあるらんとめ
こゝにおこなはれもたのん
しかしたゞ事にあらざるなり有家
のゆきもとゝいふわらうれよ
人の家よりたゞけわりとき
てうをふあるうちに中弁芳
家のまゐりたりとをいふをうんぬ
らうとこゝろ得ぬてうの日のあり
ものゝけ

あるひとのいへにかやうの花をうゑたり
けるに花のさかりにあやまちてふたつの
花のうちにうゑられたりけるを三人
六すじうゑたりけるをんなわらはれ
とあいなくもしみてうゑ
にあるをうちかくしてあるを
うたがはしきことなりけれ
ばうゑてうもせをもとうり
うゑ乃事をもとうりうゑた
すまひうれとあるまをも

うれをかくしたん
ちうゑ乃ちにうゑたる人とを
あるをふまちうゑけも
なとかくしもとひうれて
おかきれとうゑ乃ちいゑの内の
みみまをうゑて花をうゑた
ちうゆゆをとうひくるあと
をんひうゑたるをんなうゑた
るにうり
ひうゑたこあるうゑは

[illegible]れと世中とをりし
[illegible]あてなる女の
あまふるりて世中とをりし
うむして京ふもわふるる
うまふ山ちふすみをりもと
[illegible]れいくみくや
[illegible]

うむしてをふ[illegible]ね和なれ
世人うれまそをりにをりふ
とあんひやをふ[illegible]

宮あり
むしおとあらいとはなよ
[illegible]ふてあるふるう
[illegible]みとにあん
[illegible]はいあやもち
やをうんみこもれつひ
たまひふ人をあひいをりけ
[illegible]

[illegible]をとをれとはをあ
をを、
やをるふもるりまちふ

とのんみくやまとぶらぶら
ひきうれまちよ
ひしうれぶまるてあま
ふるまぶんあるうらかうら
やはしきれと畑やゆうから
えんかもりまつりみあいてあり
ぶをおかこうみくやぶ
世ぶうれあるとうんをぶうよ
ゆくせもたのまぶ
えれい前えり畑見えうもしぶ

ぶまふかくさえんあうれを
見ちりてかうりはようとあん
ひうれたこかくていたうえし
とうひやまうられいな
思ふれけあんきえんを
ぶ海よりうきんもわうを
とううれたいうれりとあひ
えれとふちいいやまちうら
ひうれたこみこそうぶをうう
ちたまふとこうあ海うてた

ほそ河乃かとのあて
を　ちやうせもきうしん三四川
かくれゐ井みわくるこハ
ひくあるおもしろきあり
うのおとこのりとうるゆ
人を四記み有うるふらつて
のうゆきといつふ人うけひ
うの墨とうとうれいふこを
おさくおうひうとをもひを
うすいをんやうこいえうゆう

れをかのあるゆんを
きくかせてやまとうめてゆ
うひふうのうおとこするゆ
を　墨くけるあにはもうあるこ川
神乃を引ちてあるうる川
ねくまいのれたこゆにうるて
流みう神ハ引つあるこ河
月ちへるゆとうハたのまん
というりうれたれとこいといあう
かくいまてまたくふんこに

いまてあらとるんふるおとこ
みをこそあらうえてうらむる事
るりうりあはれかりのつきにたん
月まつひ給月さいうひあうん
こりあはかふうしと行つけ
まうまいりおとこ女よりうて
みてやうに
すくにうとうもひとひうこと
をう
多あり波ふ八ふううまれる
どうんくやまうれうみのも
うりをとうあくまうにあまて
波とうきふうう
むうう女ゑうりのうれうみく
風吹くとうに波こひいうゑはや
りあゑはうう時あうき
とて秋りうくありひうう式
きうあうりうはれとこ
ゑあうにりうりあもうたは
水うまりあ波ふ秋と
しうおとこうもあられ人を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そや

しらたまのてにとりあてしこ
なをみるおもかげこそえいるん
とりふこうのいとうかうてう
ゆのうれしさにあふきんを
ておきのかくるやうゆと
いふかあてちけのもせてよ
かな

きそやくるもきい
撰今　えこうゆへのひれるうら

しらたまとこそうつよみちの
ふかもそゆとしいみうら京よ
ちりよ人よひやかな

拾遺　源まさのこゆまさもひ
百歌　ひさきにちりくるりね君にあひて
るふこそとんふふうくるうり
うとるんひやかな
しらたまとこそうつよみうに紅葉
ちるまひうり
なを　我そもうくちるねなうれ
二作者

きゝ乃ゆゑわいとゝへぬゝん
れたりん祢けきゝやうしゆゝく
しのまゝと忘ハ白ゐゝうきの
新古
ものゝきせらいとひろめて き
しれたゝむけくゝとゝも
せゝくはゝゆゝ心もまゝろ
うんといてゝうゝれて
古今
むゝつゝ本あまゝゝにぬゝれて
家に
あえぬゝ乃ゝわれゝきゝれし
しゝぬ乃あゝゝるゆゆれたゝこの
ゝゝみゝて
ゝれたゝ世ハ
ゝゝ
ゝみゝ今ハゝゝるれゝ
家に
ゝゝ時もゝゝゆゝの式
しゝれたゝ女乃ゝ世ハ
かゝゝゆゝ人のれゝゝふゝの
てゝ乃きゝゝえて乃ゝなゝて
拾遺
逝ゝるゆゝまゝゝゝ世ゝ
家に
ゝゝ人のゝ乃ゝゝん
しゝおゝゝ梅意ゝゝ

なまて人のゆゑにいつる秋を
ものおもふ人よりまさるせうへさん
なし
ものおもふてふうけしるる
おりしをとれきるわれしうへさん
ひしをおもこちきれはこそわや
さしまをは人ゆ
山ちのあれ水てにしをひ
たのうしひもるしをはら

とこひやまをといへんもきひ
ひしをれをこ有うら深草に
をみをはかをやうしあきかる
ものひうんのはうる秋をみ
ゆり
年をへて住うしをれいるハ
いと深草野やうのけん
なし
野をなるうつとなてるをしん
をゝうのみをにやゝ老ぬこけうん

こまゝにうぶよりそゝゆゝ
とゝふんるなにゝ
むしれたこいうるゝ事
とゝりひゝぶよりようゝ
ゝ事いてたやゝゝき
我とゝむしき人志すはい
むしれたこゝにひてゝ
ゝるゝくゝあゝえゝれて
けゝゆゝくゝみちとゝるゝてきゝ
きゝふゝとゝゝゝゝゝゝと

葉平朝臣 三品淳 正平阿保親王五男 平城天皇ニ子
母行貞内親王 桓武第八皇女母藤南子 位二位ニ殺女

年月日 官位 近将監

義和十四年正月神祇人嘉祥二年正月廿日従五位下
貞観四年正月七日従五位上五年二月十日左兵衛佐依六
年三月八日右近少将七年三月九日右馬頭十一年正月七日正
五位下十五年正月七日従四位下元慶元年正月十五日左近
衛中将十月廿一日従四位上二年正月十一日相模権守三年
十月蔵人頭四年正月十日参議権守同六年八日卒

親王 平城第三 母正五位下
承和九年十月薨贈一品

行平卿 阿保親王 一男

天長三年仲平行平守平業平賜姓在原朝臣義和七年
正月蔵人十二月侍従退日従五位下芸十年二月侍従十三年
正月従五位下右兵衛佐五月右近少将仁寿三年正五下有漸
二月正月従四位下同惟守元年兵部大輔天安二年二月中務大輔
正月左馬頭三月正月播磨守貞観二年六月内近従八
月廿六日左京大夫元年四月信濃守同月従四位下五年二月
大蔵大輔六年正月十六日備前権守三月八日兵部卒
貞八年四月正従下十年五月左兵衛督十年
二月十三日参議廿三 十六日左兵衛督十四年左兵衛督
十五年従三位大宰帥元慶元年治部卿六年正月
中納言 六十八年正位民部卿仁元年権業仁和三年
四月廿三日致仕寛平五年薨

紀有常

美和十一年正月十日右兵衛大尉嘉祥三年四月二日左
近將監四月蔵人五月十七日兼近江權大掾仁壽元年
七月廿六日兼左馬助十二月甲子従五位下二年二月廿八日
兼但馬介三年四月十六日右兵衛佐四年正月十六日兼
備後介勝尾兵衛尉二年正月従五位正四下十五日
左近少將天安元年九月廿七日兼廿納言二年二月五日
兼肥後權守貞觀七年三月九日仁刑部大輔
九年二月十日仁下野守十五年正月七日正五位
下十七年二月十七日仁雅楽頭十八年正月十日従四
位下十九年四月廿三日辛巳年六十七

二條后 中納言藤原長良女 母紀伊守紀静女
貞觀八年十二月女御宣旨九年正月八日正五位下

貞觀元年十二月廿日従五位下五節舞貞觀十年
十二月廿六日生第一皇子 十一年二月立為皇太子 十九年
立為中宮廿六
六年正月七日為太后宮
寛平八年九月廿日俗后位
延喜十年十二月薨 六十九
天慶六年五月廿日俗后位

河原左大臣融 嵯峨第十二源氏

美和五年十二月廿七日正四位下元服日 六年正月七日侍
従八年正月相模守九年九月己亥近江守十五年
二月右近中將兼美作守嘉祥三年正月十日従三位
五月右衛門督仁壽四年八月兼行摂津守斉衡三年
九月仁兼行右衛門督行摂津守如元

おうへる
五言集茅土
なりもきしたこうるれ檐と
ほくようみるそへうすけとうん
月やうそへや

六帖題

いへいえにうくいかるきふえ竹の
うこうやうれうくぬ人りるし

宋玉神女賦

素賀幹之醲實弓志解秦而體閑

曹子建洛神賦

環姿艷逸 儀靜體閑

みやひうやひうやとい河
其ふうやむをかなるみとい
るうけとうふ風ふうる狩

天福二年正月廿日己未申剋淩
桑門之旨日連日風雪之中遂
此書厚爲授鐘愛之孫女也同
廿二日授了

執行藏書